



★日本詩壇拾月號 第二卷 第七號 目次★

再びモンタージュの問題

半谷三郎 伊作三郎 浦原邦太郎 古衛

文藝復興の詩壇展望

杉浦伊作 三郎

新しき表現様式としての散文詩型

杉浦伊作 三郎

ホエジイの純粹性

北園克衛

詩 篇

春の行状 飯田龍男 田代百合子 飯田龍男 田代百合子

篇 謠 歌

矢野龍渓 矢野龍渓 矢野龍渓

★わが愛讀の書・アンケイト(その一)……詩壇諸家言

ホルンヴァイズムの詩に就て(エザペス・シヨウ)……荒木勝良譯

★詩人鳴物陳列場「ゴジツ」

浪(詩) 森田四郎 矢野清(元)

三つの詩集

福田正夫 岡本彌太夫 折戸彫夫

盛夏變貌 横川茂一 水葬の詞 鹽野寬一郎 獄 若月利秋 煙 蓬萊隆次 野 島田惣二 街の暮色 細川 楓 三須映兒 裏の街 長谷川七郎 男の日の 池田克巳 同 志 園路一彦

都市雜感 渡邊香雪 あの娘思へば 多木伸(天) 高利貸の唄 小春久一郎(充)

★最近歌謠界展望 各誌發表作品抄 一般投稿欄 白鳥省吾夫人追悼の頁

白鳥省吾夫人追悼の頁……八泉芳朗、福田正夫、月原燈一郎、高橋たか子、吉澤彌勝



### 初メノ化學實驗

吳 チャン ホアン

余ハ アルコールラングニ燐子ヲ擦スル。  
焰ハ 金網ヲ超越シテ 天井ヲ舐メヤウトスル 高熱ノ  
情慾ヲ。

海ハ 誰方泣イタ涙カチ。

詩 No.17

幼イ頃ヲ ッカン子置イタ余ノ鏡ヲ見ル。

此奴ハ進歩ガナイ。

詩 No.11

At balloon ハ 輕業ヲスル。

五階ノ屋根ノ上ニ舞臺ヲ定メテ。

日 垣 又 信

### 純ヲ求めて

涙ハ シホカライホ。

詩 No.6

銅線ノ 胸圍ガ ヒロインデ、  
彼女ガ 發火點ニ着達シタトキハ、  
トックニ 余ノ古いラングンハ冷却サレタ。  
余ハ 化學實驗ヲシクテツタ。

君ガ再び現れた時  
奇怪な壓迫的幻影が  
恐怖の肉體に彷徨ふ  
性慾の戰慄  
君への靈魂の誕生  
不純粹に對するその泉は  
聽ては君のそれより迷うのではないか  
あゝ迷へる性慾  
それ程に不純粹に對するそれを  
顯微鏡にて發かんとするか

不純粹より生れ  
それに歸するは  
人生の律動ならんか  
而して純粹に生きんか  
回歸！ 回歸！ 死地に

### 靜なもの嵐

山 野 し げ る

俺は言ふ事も出来ねば

聽く事も出来ないものだ。

だが、俺の仲間は毎日黒い物をベタベタと塗られて何處  
かへ行つてしまふ。

或日、俺の上にも黒い物がベタベタと塗られて、小さな  
家に投げ込まれてしまつた。

中から蒼白い顔の青年が出て来て、

俺をひらげて注意深く眺めた。

三十分程眺めたかと思ふと、俺を投げ乍ら、靜かなもの

### III

福 富 武 人

妻をむかへて

うつゝともなく見る 今宵の食卓  
皿に盛りだされた生活ではあるが

この ひびきには強いて無駄口もたぐけまい

ふとしたはずみに







秋

西村紀代詩

コスモスの花が今朝も一本倒れてゐた。  
女はそれを起したりなんぞしてゐた。

透明な玻璃器の中で女の心臓がビクビク動いてゐた。  
女はもう人妻であつた。

ゆくりなく逢つた郊外の静寂に

女の白い足袋丈が魚腹のやうに生きてゐた

哀悼 諠

風、風、凄じき風、恐怖すべき地上最大の二重人格

汝よ、何故に斯くも狂ひ、喚き暴行を擡まゝにしたるぞ

あらゆる神々を潰し、幾百の人命を奪ひ去りしぞ、

「日本の教育」を斯る手段に於て證化せん爲にか、將

昨夜の易者が長命保證を嘲笑ふ爲にか、おゝ、未だ眼前

△悲しき犠牲者の靈位に▽

影を捨てる

ひとごとではない  
この傷付ききさんだみづからをふりかへる。

影が動くのは自分が動くからだ。

影を捨てよう。

上 林 猷 夫

に髣髴たるあの當時の慘絶、悲絶――

人々はやがて降り來つた冷雨の中に呆然と行み親を失ひ

子を嘆き唯だ爲す所なく己が變り果てたる地のあたり

眼落つ。

今は變り無く打寄する濱邊の波に哀れ手、子を抱きたる

形の若き母親の姿、子投けて空塵、

手に讀本を抱きしめ、血ぬられて隣間。

嘔、嘔、之を語らんにも言葉在らず、

我この世に生れ且つ生きて之に遭ふ、

今致に思ひ患ひて立つしはし。

吳

チヤン

ホアソ

太刀モチテ 切り合フゾアレ。

砂ベリニ 日光浴スル。

涙ヲキス子龜ハ裂カレタ心臓ヲ繕フ。

野 蠻

名簿ニハ 赤インキヲ消サレテキタ。

F、OR、

匕首ノ刀傷ヲアル。

字ト字モ決闘スルヲシイ。ニユ一、フソ、キホ一テ、ヲ  
モサウシ、ヨソジユニキンデアル。

今日モ彼ハ余ノ記憶ヘ遊ヒニ來タ。

余ノ下宿ニモ 小サナ野蠻ヲ宿ツテラシイ。

裂カレタ心臓ヲ繕フ

トソク型ノ久利子。ミス、チエーソジ。

ソソノ噴水ヲ搾ル子龜ハ裂カレタ心臓ヲ繕フ。

『心臓ハハイトヨリ古キデアルナリ。タズンナリ。仕立  
時間ヲ延ビルヲウサト思ハルナリ。イヤ、此ノ間余  
ハ太陽ヲ被ツテ死ヌルナリ。』

死――

オ一靜肅ナル死ヨ。

『余ハタマニ苦シイ時ニハ 心地ノ好キ場所ヲ選ビ

『余ハ太陽君ト供ニ昔ノ侍ノ如ク二人、ソレモ寂シク助



1935.1

# 日本詩壇新年

特輯號

【第三卷第一號】

## 目次

★	新	興	詩人集	(名八順)
★	全	國	詩人(三名)	住所
★	主	要	詩誌	一覽表

對座 井上逸夫(六)  
 自責が何んでい 池田克巳(六)  
 谷間の歌 今井嘉澄(八)  
 旅の怨 石井芳宏(九)  
 擣搗 ヤ 石川和民(〇)  
 轍 鞍山子の懺悔 林光則(二)  
 業 長谷川七郎(三)  
 靜夜 濱田可昌(四)  
 橋を渡る 堀江末男(四)

荆 棘 奥 保(二四)  
 どん底で唄ふ 大杉 享(二六)  
 おお 迎 火 中島 白人(二六)  
 氷 若月利秋(二七)  
 無 題 奥田 盛善(二八)  
 横丁の大將 渡邊 香雪(二九)  
 合 掌 平多都二(三〇)  
 蒼 園 川口 敏男(三一)  
 母 川平 洋一(三三)  
 渡 鳥 神尾 春美(三三)  
 秋 上林 猷夫(三三)  
 壓 横川 茂一(三四)  
 瀨 曙 谷外 尅夫(三五)  
 土 上 横田 久次(三六)  
 檻 谷村 博武(三六)  
 愚かな 昏 田丸 高夫(三七)  
 臨 終 寶 木 徹(三八)  
 白 旗 高 木 寂(三九)  
 樹木と貝殻 竹部勝之進(四〇)  
 海底の譜 多 木 伸(四〇)

斷 想 堀 清(二五)  
 轉 居 蓬 柴 隆次(二六)  
 冬 花 富 松 良夫(二七)  
 肉體 龍 士 閃(二八)  
 女ノ心ヲ貫フ 吳テヤン・ホアソ(二九)  
 十一月 太田 利夫(三〇)  
 雪 山 大野 良子(三一)  
 道 大 木 英(三二)  
 朝鮮人の子 大元清二郎(三三)  
 悲愛の賦 大鹽 虹雨(三四)

鴉 丹 志 幸(四一)  
 おらも 達者で 土屋二三夫(四二)  
 雨の日記 内藤 錦(四三)  
 爪 痕 成田 武夫(四四)  
 鞭の痕 中川 陶雄(四五)  
 U町の雨 中村 わか(四六)  
 石ころ 長崎 銀也(四八)  
 泣くが無理がよ 南條 歌美(四八)  
 子に焼びて 山縣 深雪(四九)  
 堰 武藤 和夫(五〇)  
 渴望の日々に 村上 盛實(五一)  
 天井 畫 瓜田 豹太郎(五二)  
 日向 葵 野間 宏(五三)  
 土 偶 柳澤 龍吉(五四)  
 皮 松野 湖雄(五五)  
 告 示 柳 黄二(五六)  
 海邊の塚 山路 青佳(五六)  
 サカアス 丸山 豊(五七)  
 松 穂 よ 松木 嘉之(五八)







# 龍

# 士

# 閃

## 肉體 (どに角、生きてゐる)

此の詩人は日頃プロクリアリスムの方法として彼独自の方法をとつてゐる。その點を買ひたい。こゝにある時はむしろ批判的觀念の勝つた詩だ。この詩人への要求は一段の現實把握の眞剣な適確さと適度の言葉の選擇と節約だ。彼の將來の大成を信じて、アチアル詩人と目されてゐる私があつて、此の詩人を推薦する所以である。(推薦者 オリド・ホリオ)

レールは歪んでゐる、過重の重みに

白日である。AVH AVH 飛び出した鴉が云ふ 生きてゐる 生きてゐる くらばるまで  
は。公式主義が使ひ古した古煙突は、西の空に凋落の火の柱だ 燃える、燃えろだ  
廿世紀のシンボルめ

倒れかゝつた凱旋門 戦争に救済された虚飾の門。  
築えに 築えて 萬歳か

深夜がくる、第三期 エキスカの匂ひの激しさ 痛む肺は腐つてゆく 蠢めく班蛇の、火  
の口が黒く裂け、叫ぶ聲「ともかく死ぬまで生きてゐるのだ」

往生しろ、廿世紀の垂麗で病弱な肉體め！ 鐵槌を十字架に――

第三期 腐つた肉體をおちろめ 蒼然と助を抱いてまじろび深夜が来た。

# 吳

## チヤシホアシ

大正七年五月十五日生。本名 吳養煥 昭和七年徵文高等普通學校(内地)の中學に相當( )に入學 今に至る。朝鮮文にては詩を「朝鮮文學」「朝鮮日報」に童謡を「オリニ」「子供生活」「朝鮮日報」等に發表せり。昭和九年の春より日本文の詩を書く。「日本詩壇」同人。著書なし。

## 女の心を貰ふ

譯も知らぬ涙が、彼女を産んで呉れます。  
産んで呉れます。

此の冬、硝子の破れた温室には 又も 墓が微笑むのです

草。草。  
季節ヲ供フ小蝶ハ 幸福ナンデセウカ?

急に胸の中へ蟬が止まりました。ミン、ミン、ミン、ミン、  
蟬は 此音を泣き明かすのでせうか?

流るる涙。涙に乗り行く心  
初めに女を失ひ ホクは 女の心を貰ひました。

## スゲツチ

消防服をかけた 蝶蝶が 薔薇の中で火戯をします。

## 詩

No.1

火山ガ 爆發シマツタ。

戀ハ石榴ノ實ニ燈ラツケテ 余ハ余ノ暗ノ部屋ニ ツレテ  
行キマス。

此ノ名譽ヲ ホクハ勳章トシテ ツケタナシ  
于嗟！ 此の冬を氷山にて過さねばならぬのでせうか?







心臓と呼吸はかわるがわる寢えはじめ  
一切が絶無を前に

自分はふたゝび火を追ふであらう  
ふたゝび火を念じ狂ひ出すであらう

### ぼへみあん・回想

かわいらしいぼんぼんになつたといふ  
そのほろがなんぼひんがあるかしれんといふ

ぜんりやうなぼんぼんになつてかみをちよんぎつてからな  
んねんたつたらう  
なにしろいつしやくあつたといふからこのむらではさうた

### 放浪記 (推薦)

僕は花を忘れない。その花は僕に襟襟を表す。廣縁のやう  
禁苑は僕に生命を興へる。強烈な秋雨に風見鶏は黄昏と古  
風な窓飾りと音聲の強いピアノを混合する。  
日輪は僕に掌を向ける。そして湖は鹽辛い追憶の泪を夜光

うおほきなもんだいであつたにちがひない

あいつは××××だ

あいつは××をみとめてゐない

せいねんくわいでばてえゑるをたういたといふ  
そんなくわいにはあがらなかつたらしい

あのかみはかくちのけいじさんとしたしくなつた

いまでもきみはげんきか、じをかいてゐるかてがみをく  
れるけいじさんがゐる

わかいころのほうらうをおもふだけでもわたしはしあはせ  
になる。

### 高倉隆英

蟲のやうに光らせる。

僕の倦意を叫ぶ秋風は聖書の如く蓮の花は碧空と西南風に  
愛撫せられる。そして放浪の聲音に影のない僕は逃避す  
る意力をもたぬ原子價であらう——

### 捕

### 虜

吳\* チヤンホアソ

☆ こらツ！ 何故注意ヲセズニ コソナ所へ來タカッ！  
新米の靜肅ナル洗禮。★

頭と、頭と、頭と、頭と、

聖壇ヲ臭ワセル額ト鼻の穴。疎ナル糞。

新米はガラス窓のない部屋の中で先輩の見學をする。

寂しく出入イタル窓へ 故郷ノ土ヲ香ハセルカ、

うす暗いセメントの床に 若い男は爪を磨く。

用途ヲ失ナツタ勳章ハ婆ヤノ乳房デアル。

あゝ 戸外のおの音は雨が降るのか、監兵の小便の音か。

上官は下官の刀傷から コアを舐める。

弱き者程、カンヂーになることが出来る。

ガンヂー

カンヂー

靴底をびしる。男ハ辛を志望する。